

機関番号：33102

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20730107

研究課題名 (和文) 現代におけるコスモポリタニズムの可能性に向けて—カントを中心に

研究課題名 (英文) Toward Cosmopolitanism in the Contemporary World: A Kantian View

研究代表者

佐治 幹英 (SAJI MOTOHIDE)

国際大学・国際関係学研究科・准教授

研究者番号：50445897

研究成果の概要 (和文)：カントのコスモポリタニズムの基底にある、理性の不安定さと合理的生活の脆さにより特徴づけられる人間という人間像を包括的に描き出した。この人間像は従来の研究で論じられてこなかった。その点で、当該研究は意義の有る貢献をしたと言える。研究成果を英語専門書籍として出版するための書籍原稿初稿を書き終えると同時に、英語で二つの論文を出版した。

研究成果の概要 (英文)：The research elucidated the view on the human being underlying Kant's cosmopolitanism that the human being is informed by both the precariousness of reason and the fragility of our rational way. My research makes a contribution in that the view noted above has been under-researched in the existing literature. Ultimately, I intend to publish the result of the research as an academic book in English, and I finished a first draft of the book manuscript. A part of the result appeared as two articles in English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：

科研費の分科・細目：政治学

キーワード：カント、コスモポリタニズム

## 1. 研究開始当初の背景

カントは「世界市民 (weltbürger, cosmopolitanism)」という語を三つの意味で使う。当該研究は第三の意味の内実を明らかにすること、及び第三の意味が第二の意味の現代版にどう繋がるかについての見通しを得ることを目指した。第一の意味は道徳的な意味。個人が他者一般に追う道徳的義務とそうした義務に基づく道徳的共同体 (目的の王国、倫理共同体) を形容する。第二は政治的な意味。世界市民権 (法)、世界市民社会に

ついて論じる際に用いられ、カントの歴史政治論集に見出される。これら二つの意味はよく論じられている。第三は哲学的人間像をあらわす意味。人間の条件を示しつつカント自身の哲学全体を特徴付ける際に用いられる。具体的にはカントが「論理学」の中で自身の哲学全体を「世界市民的意味」での哲学と特徴付け、この哲学の取り組むべき課題は「人間とは何か？」という問題に集約される、と述べている箇所を指す。

カントのコスモポリタニズムについての

議論は現代におけるコスモポリタニズムの理論的支柱の一つをなす。近年コスモポリタニズムへの関心の高まりとともにカントの議論についての研究も盛んであるが、そうした研究は上述の第一第二の意味については論じているが第三の意味については殆ど論じていない。論じられていないのは、従来の研究が第一の道徳的意味を当然の基盤と見なして、「合理的、反省的、自律的、自己について説明を与えうる、自由な主体」という哲学的人間像を第三の意味（「人間とは何か？」）として暗黙に理解しているためだと思われる。

しかし当該研究代表者佐治（以下、佐治）は、カントの著作を吟味してみると前述の人間像とは全く異なった人間像が浮かび上がってくることに気付いた。全く異なる人間像とは「理性の不安定さと合理的生活の脆さに特徴付けられる人間」という人間像である。以上を背景として、佐治はこの異なった人間像を明らかにすべく研究を開始した。

## 2. 研究の目的

研究の目的は三つ。第一に上述の異なった人間像を包括的に描き出すこと。第二に従来の研究に寄与すること。狭くはこの人間像が従来のカント研究では論じられてこなかった点で。広くは、この人間像と類似した人間像がカント研究以外の研究において論じられているが、こうした議論と佐治の議論との異同を示唆しカント以外の研究との生産的なダイアログの可能性を示す点で。第三に、当該研究で描かれた人間像が現代のコスモポリタニズムの可能性に具体的にどう寄与するかについての見通しを立てること。

## 3. 研究の方法

研究は全て英語で行った。方法はテキストの精読と研究者仲間との議論につきる。英語研究文献へのアクセスと研究者間での存在の点から、二年間の研究期間中の二夏とも、十週間ほど米国シカゴ大学に滞在し生産的な研究執筆活動を行った。

## 4. 研究成果

上述のように当該研究は「理性の不安定さと合理的生活の脆さに特徴付けられる人間」という人間像を包括的に描き出した。具体的には六つの点から描き出した。前述のように佐治は研究成果を最終的に英語専門書籍として出版することを考えている。書籍原稿は六章立て、各章はそれぞれ上記六つの点の各点を論じる構成となっている。

六つの点は以下の通り。第一に、カントの批判哲学は理性の正当性と我々の合理的生活の安定を保証することを目論むが、この目論見が失敗するであろうという不安をカン

トが持っていたことを示した。具体的には、カントが、批判哲学が絶対的に安定した基盤の上に成立している真理であることを確信し続け「なければならない」と述べている箇所と、批判哲学以外の全ての哲学の失敗に対する激高した「笑い」が炸裂している箇所に焦点を当て、この奇妙な「なければならない」と「笑い」の背後に前述のカントの不安を読み取った。第二に、カントは理性の活動に不可避免的に内在する除去不可能な暴力を見出していることを、政治的領域における理性についてのカントの考えをもとに論じた。具体的には、理性が自身の原理に従って活動し自壊していくというカントの洞察、そうした自壊を防ぐためにもまた理性がその活動を開始するためにも、理性は自身によって正当化できない外部に基づいてなければならない、しかしそうした正当化できない外部に基づいている点で理性は自己の権威を正当化できないというカント洞察、を明らかにした。

第三に、人間は無意識の諸力に翻弄され騙され支配されており、また人間の行為の道徳的動機は常に自分自身に不透明である、というカントの考えを論じた。カントは理性の働きを人間の意識特に自己意識と切り離せないものとして論じるが、じつは意識とは人間の心のごくごく小さな部分に過ぎず背後に意識に上らない諸力があり意識に上るものはそうした諸力の結果である、とカントは論じる。カントは彼の公的な哲学においては道徳を人間の最高の目的であり人間性の最高規範であると論じるが、他の箇所では実は人間はもともと道徳的存在では全くなく、身体規律訓練・各種懲罰も含む広い意味での教育によって、しかもそうした教育課程の大部分を忘却することによって道徳的規範を内面化し道徳的存在になるのだ、と考えている。第四に、カントは、一方で理性と非理性の間には規範的で、明確ではっきりした分割があると論じる。他方、理性と非理性あるいは合理と非合理の分割は曖昧で流動的でありさらにそうした分割は無効である、と論じていることを示した。まず我々は理性と非理性の分割の規範的根拠を首尾一貫した形で説明できない。次に理性と非理性は各人に様々な程度で多様な形で共存する。最後にカントは、非理性の極端な場合よりもさらに理解不能な生活様式を合理的な生活様式だと主張することで、理性と非理性の分割そのものを無効にする。カントが言うのは、人間は結局理性的な存在なのだということではなく、人間の生活形式は理性と非理性の分割が成り立たないような脆い基盤の上に成立している、ということである。

以上、第三、四点は、人間は究極的には自身にとって不透明であり自身の活動について一貫した規範的説明を与えることができ

ない、というカントの考えを敷衍したものである。カントにとって理性とは、人間が自身の活動について首尾一貫した規範的説明を与える能力あるいは活動、であり、従って第三、第四点におけるカントの議論は、理性の不安定さ脆さをカント自身が積極的に論じていることを示す。

第五に、十分な理性的活動を開始する前の人間は根源的受動性にさらされており、こうした受動性の影響は十分な理性的活動を開始できるようになった後も、理性の支配の及ばない形で人間の生活に影響を与えている、というカントの洞察を論じる。人間は常に他者（の言語、意味、規範）に先立たれあるいは遅れており、この遅れへの不安・不当さの感覚・無力感から理性が発達するが、理性の発達により他者を不可避免的に模倣し自己内に繰り込み、しかしこの模倣と繰り込みの経験が自己意識に入ることができない、その意味で無意識であることによって、人間は主体になる。また、人間は根源的なコミュニケーション衝動、新生児期における身体を意のままに操りたいという欲望、身体を意のままに操ることの不可能性、前述の欲望をコントロールすることの不可能性、等々になすすべもなく根源的に受動的に晒されており、そこから他者の模倣と他者との競争を通じて自己の欲望を仮構し内面化する。カントはまた理性を自由に選択する能力と捉えるが、選択するかしないという選択はなくその意味で理性の活動は人間が能動的に開始するものではなく根源的に受動的に人間に襲い掛かる。その際人間は不安と恐れおののく。カントは、理性の活動が人間を襲う瞬間を、人間が無限の深淵の中に飲み込まれていくこととして描く。第六に、人間の諸能力（感性、知覚、概念、想像力、アフェクト）は、カントの批判哲学で割り当てられ定められていた機能を超え、より多様で豊かで創造的あるいは常軌逸脱した活動を行いうるのだ、というカントの考えに焦点を当てる。この考えを示す際カントは芸術家の活動を範例として挙げる。興味深いことに、カントは理性をこうした批判哲学で定められた以外の活動を行うものとしては描かず、理性以外の諸能力のさまざまな諸活動は理性によってコントロールできるものではないと論じる一方、こうした諸活動は理性の活動よりポジティブな影響を与えること、したがって理性は自身内部からではないが理性以外の諸能力によってその活動が変化しうることをカントは示唆する。いずれにせよ、カントは、人間は、カントの批判哲学が描き出すあるいは我々に思わせるよりもより多くのことをなしうるのであり、批判哲学は人間のそうした潜在能力を適切に扱い得ないのだ、と考えている。

上述書籍原稿のほか、研究成果として英語

で二つの論文を出版した。二論文のタイトルと掲載先は以下5に記す。一つは上述の第四点目を論じたもので、もう一つは上述の人間像が現代のコスモポリタニズムの可能性に具体的にどう寄与するかについての方向性を示唆したもの。後者について説明する。カントは「世界市民」という語の第二の政治的意味でのコスモポリタニズムの議論になると、決まって感情 (feeling Gefühl) の要素を強調する（「永久平和のために」「道徳形而上学」「世界市民的見地における一般史の理念」「実用的見地における人類学」）。この feeling は「受苦者の立場に自分を置き共感すること」を可能にする（「道徳形而上学」）。カントが feeling を強調する理由は、上述の理性の不安定さと人間の理性的生活の脆さを認識しているからである。このような形で、当該研究で描かれた人間像が現代におけるコスモポリタニズムの可能性に具体的にどのよう寄与するか方向性を示唆した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

Motohide Saji, “On the division between reason and unreason in Kant,” *Human Studies: A Journal for Philosophy and the Social Sciences*, refereed (査読有), Vol. 32, No. 2 (June 2009): 201-223

〔学会発表〕（計 1 件）

〔図書〕（計 1 件）

Motohide Saji, “On an East Asian community, or Kant’s cosmopolitan right reconsidered,” a chapter contribution in *Globalization and Regional Integration in Europe and Asia* (Aldershot, UK: Ashgate, 2009), pp. 123-142

〔産業財産権〕

○出願状況（計 1 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐治 幹英 (SAJI MOTOHIDE)  
国際大学・国際関係学研究科・准教授  
研究者番号：50445897

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：